

今回はボサノバという音楽について書いて見ます。ボサノバは日本では人気がある音楽のジャンルで、ボサノバシンガー、ボサノバギタリストというように、専門に歌い、演奏しているミュージシャンも少なくありません。もちろん、ジャズミュージシャンが演奏するケースも多く、一晩のジャズライブがあれば、ボサノバの曲か、あるいはいわゆるスタンダードをボサノバのリズムで1曲は演奏することが多いですね。

ボサノバの人気があるのは、まず名曲が多いことでしょう。特に、ボサノバを代表する作曲家のアントニオ・カルロス・ジョビンは、ドビュッシーなどクラシック音楽の印象派から影響を受けて、新しい感覚の素晴らしい曲をたくさん作っています。ジョビンの曲はコード進行が何とも現代的でカッコよく、アドリブ命のジャズミュージシャンを今でも触発します。

ジャズとは別のポピュラー音楽としてのボサノバは、ブラジル生まれのボサノバシンガー、小野リサが改めて魅力を広めたという面もあるでしょう。小野リサが歌うボサノバは、日本人がブラジルに持つ明るいイメージを前面に打ち出していて、ブラジル人が歌った陰りのあるボサノバとは同じ曲であってもかなり違う雰囲気ですが、非常に耳に心地よいのは確かです。

#### ◎本国のブラジルでは衰退

日本で人気のあるボサノバですが、発祥の地であるブラジルでは、こんにちほとんど演奏される機会がなくなっています。ブラジルの大衆音楽はあくまでサンバであり、ボサノバはいわば忘れられた音楽になりつつあります。若いブラジルの世代にとっては、自分の親の世代にブームになった知的でナイーブな雰囲気を持った音楽で、今聴くにはちょっと恥ずかしいというニュアンスです。

日本ではある時期のフォークソングにも似たように見られているようです。ボサノバが生まれた当時の状況を紹介しながら、変遷をたどってみましょう。

ボサノバが生まれたのは1950年代後半のリオデジャネイロ。イパネマ海岸、コパカバーナ海岸に住む白人中産階級が、サンバとは違う知的な音楽を生み出しました。中心人物はジョビンに加え、作詞家のヴィニシウス・モライス、ギタリスト/ヴォーカルのジョアン・ジルベルトといったミュージシャンでした。最初のヒット曲はジョビン作曲、モライス作詞のChega De Saudade。ジョアンの歌によって1958年にリリースされました。日本語では「想いあふれて」というタイトルがつけられています。

前年に有名な女性シンガー、エリゼッチ・カルドーゾの吹き込みで一度リリースされましたが、ヒットしませんでした。ジョビンやジョアンは、曲の内容と歌い方がマッチしていないためと考えてジョアンの歌で再度チャンレンジしました。ジョアンの弱々しいような歌、女々しい内容の歌詞のため、売れないだろうという声もあったといいますが、実際には大ヒットしました。

ジョアン・ジルベルトのChega De Saudade  
<https://www.youtube.com/watch?v=yUuJrpPOMak>

Saudadeというポルトガル語はボサノバを語る時に欠かせないキーワードです。作詞したモライスは外交官にして作詞家という多能な人で、彼は郷愁、思慕、切なさといった意味を持つこの言葉を主に失恋のシチュエーションで巧みに使ってブラジル人の心に沁みる歌詞を生み出したと言われていました。自分などは女々しい内容の歌詞だと思ってしまうのですが、当時のブラジル人にとっては魅力的だったということなのでしょう。

Chega De Saudadeの和訳歌詞  
<https://plaza.rakuten.co.jp/xxjazz/diary/200507030000/>

最も有名なボサノバ曲のイパネマの娘 (Garota de Ipanema) も、ジョビンとモライスのコンビによる傑作ですが、ここでもモライスの詞はSaudadeという言葉こそ使っていませんが、美しい女性に憧れてもかなわない男の想いみたいなものにこだわっています。  
<https://4travel.jp/travelogue/10752272>

この曲には実際のモデルがいたというのが面白いところです。ジョビンとモライスはリオのイパネマ海岸にあるVelosoというバーによく言っていて、そこに母親のタバコを買いに来る、エロイザ・ピニェイロという長身の美人を見てこの曲を作ったと言われていません。68歳当時、日本のテレビにも出たようですね。

歌詞は別として、ジョビンの曲は本当に素晴らしくて大好きです。これについては次回に予定していますので、今回はその後のボサノバの展開についてもう少し書きます。

#### ◎アメリカでのボサノバブーム

ボサノバのムーヴメントに影響を受けたのがアメリカのポピュラー音楽、特にジャズのマーケットでした。多くのジャズメンがボサノバを取り入れたりジョビンやジョアンと共演して成功しましたが、中でも有名なのはスタン・ゲッツです。

ゲッツはチャーリー・バードとの双頭リーダーでボサノバを取り入れた「ジャズ・サンバ」を1962年にリリースしてヒットさせましたが、翌年にジョアンとアストラッドのジルベルト夫妻、ジョビンを招いて「ゲッツ／ジルベルト」を録音します。当時のアストラッド・ジルベルトはアマチュアシンガーだったと言われますが、彼女の魅力を感じ取った辣腕プロデューサーのクリード・テイラーはなんと、主役であるジョアンの歌（ポルトガル語）をカットして英語で歌ったアストラッドの歌だけを残して「イパネマの娘」をシングルカットして発売しました。

結果、ビルボード誌のヒットチャートでアルバムは2位、イパネマのシングルも5位とシングルも大ヒットし、グラミー賞も何部門か受賞しました。。スタン・ゲッツのフレージングと音色がジョビンの曲にとっても合っていて今聴いてもとても楽しめます。やはり黒人ミュージシャンとの共演では生まれなかった音楽だなと感じます。

<https://www.youtube.com/watch?v=c5QfXjsoNe4>

シンガーとしては、ボサノバのミューズ（女神）と言われたナラ・レオンについても触れないわけには行きません。ボサノバ勃興期、ジョビンやモライスは裕福だったナラの家によく集まって音楽を作っていて、当時からナラはアイドル的存在だったようです。

しかし、レコードを吹き込み始めた頃からブラジルでは軍事独裁政権が成立し、ナラもボサノバより政治的なプロテストソングに傾斜して行きます。マスコミもナラに政権を批判する文化人的な役割を求めた面があり、政権に目をつけられたナラはフランスに亡命しました。「私はボサノバのミューズなんかじゃない」と有名なセリフを残しています。

その後1971年にはパリで「Dez Anos Depois」というボサノバの本格アルバムを吹き込みました。原題は「10年後」、邦題は「美しきボサノバのミューズ」とつけられました。

このアルバムが良いんです。Chega De Saudadeを聴いて下さい。まず、マイナーで始まる何とも物悲しい歌い方に惹かれます。同じ曲でも小野リサの歌い方とは全く違う曲の印象に驚かされます。アレンジの違いもあるのですが、声質や歌い方によるところが大きいと思います。加えて、30秒、1分8秒辺りで聴かれる、声を出し終わった後の息の吐き方も録音されていてこれが何ともセクシーです。  
<https://www.youtube.com/watch?v=DvgueWwP9HQ>

ナラ・レオンはこの後も演奏活動を続け、2度の来日も果たしましたが、1989年に47歳の若さで亡くなりました。

小野リサのChega De Saudadeも聴いて下さい。これも明るくて良いですが、まるで別の曲のような印象を受けます。  
<https://www.youtube.com/watch?v=5MbEIGrp7Ko>

最後に、訳詞の問題についても触れておきたいと思います。ポルトガル語で作られた音楽をアメリカで売るために英訳もされましたが、中には原曲の雰囲気にとぐわぬ歌詞を

つけた例もあります。Chega De SaudadeはNo More Bluesというタイトルの歌詞をシンガーのジョン・ヘンドリック스가作りましたが、これがなんというか能天気で自分的には感情移入できません。

[http://www.kget.jp/lyric/180219/No+More+Blues+%28Chega+De+Saudade%29\\_Carmen+McRae](http://www.kget.jp/lyric/180219/No+More+Blues+%28Chega+De+Saudade%29_Carmen+McRae)

「もう憂鬱はたくさん、故郷へ帰ります」というだけのことを言うために言葉を変えて延々続けているだけで、何の情緒も感じられません。原曲の女々しい歌詞も好きではないですが、換骨奪胎とはこのことでしょうか。日本語訳も検索すると出てきます。

日本でボサノバを普通に聴いていると曲の良さだけを感じていただけるのですが、本国における発展と衰退、歌詞に込められたSaudadeなど、陰りも深みもある音楽だと感じます。次回は、ボサノバ曲や演奏の音楽的側面に焦点を当てます。

-----  
Lydianからのお知らせ 7月初登場のミュージシャン

◎7/6 エイコソラリス(vo) トリオ  
エイコ ソラリス(vo), Dennis Lambert(p), Tyler Eaton(b)

◎7/14 中溝ひろみ(vo) トリオ  
中溝ひろみ(vo), maiko(vl), 宮之上貴昭(gt)

◎7/26 マミコ・バード(vo) トリオ  
Mamiko Bird(vo), 福田重男(p), 古谷悠(b)

◎森田真奈美(p) カルテット  
森田真奈美(p), 中園亜美(sax), Zak Croxall(b), 山内陽一郎(ds)

-----  
JAZZ LIVE Lydian 中川貴雄  
tz252858@yd6.so-net.ne.jp